以前はのき先にありと見ゆ、

〔我衣〕伽羅ノ油ハ古來ナシ、〇中略大坂落城ノ時、木村長門守重成、河内若江口ニテ討死ス、必死トキハメ、首ジツケンノハレニセント、伽羅ヲ胡麻ノ油ニテ煎ジ髪ニスキコム、家康公其必死ト極メタルヲ感ジ井伊掃部頭内安藤長三郎木村ヲ討タマヒテ、御褒美ノ御詞アル、此事諸書ニ少シノ違ヒアリ、是伽羅ノ油ノ始ナルベシ、

寛文年中、日本橋室町一丁目ヘ若衆方中村數馬、伽羅油ノ見世ヲ出ス、少シ前ニ糀町ヘ谷島主水トイヘル女方、油見世ヲ出ス、是油ミセノ元祖ナルベシ、淺草虎ヤ一之進ハ又少シ其後ナリ、其比武士ハ油ヲ付レドモ、町人百姓ハ油元結ヲ不用、依之遠方ニテモ曾テ事欠ズ、用ノ序ニ油ヲ求メニ來ル、正德迄ハ蛤具ニ一兩入、二兩入、三兩入、曲物五兩入、

中村數馬

上油一兩ニ付代廿二文　極上白匂油一兩代三十六文　極上々黑匂油一兩代四十文

右之通ニテ賣ニ、甚買人多シ、勿論蠟ハ下直ナルユヘ、至極吟味致シ、香具ヲ入、以梅花練ユヘ直段甚高直ナリ、寶永年中ヨリ髪結床ニテ晒蠟計ノ油ヲツカフナリ、十五兩ニ付百二三十錢ナリ、長クシテ紙ニ包、正德ヨリ世上蛤具ヲ不用、皆々包紙ニナル、油モ麁相ナリ、四兩五兩トイヘ、價四十錢、或ハ五十文、或ハ百文ニ十四兩ニ賣ナリ、

〔昔々物語〕一昔と大に替りたるは、伽羅の油、きざみたばこ夥敷賣なり、〇中略むかしは伽羅の油御旗本に一生少も附ざる人多し、付る人も髪のはへさがり、又は月代たてゝ、未だ毛の延ざる人少しづゝ付し、女抔は一向不附依之伽羅の油賣所、湯島天神に一ケ所、明神に龜やとて一ケ所、芝にせむしとて一ケ所、麹町に一ケ所、牛込に笹やとて一ケ所、江戸中に六ケ所ならでは賣所なし、便にあつらへ、或は京都へ誂へ抔して調、貝も今の如くにはなし、少き目藥貝程の貝に入て賣、付る